『新編立川市史　通史』執筆要綱（案）

体裁について

版型

※Ｂ５サイズ・縦書き、２段組みとする。

※文字数は、本文ポイント（後述）を基準として、27 字× 19 行× 2 段（1026 字）とする。

※版面は、高さ 215 ミリ×幅 137 ミリとする。

※小口には編ごとにインデックスをつけ、「第一部」をつける。

※柱には章タイトル（右ページ）、節タイトル（左ページ）をつける。

ページ構成

各巻に巻頭カラーを設ける

原則として、見開きごとに、図、写真、表をつける。

編目構成

部、章、節、項、吊り見出しとする。

見出し

部　「第一部　先史」（中扉、太字 22 ポイント、3 行取り、段落背景紫・文字色は紙の色と同じ）

※部番号は、上巻・下巻ごとの通し番号とする。

『新編立川市史 通史編　上』「第一部　先史」「第二部　古代・中世」「第三部　近世」

『新編立川市史 通史編　下』「第一部　近代」「第二部　現代」

章　「第三章　縄文社会の成熟　縄文時代後半（中期・後期・晩期）

※（2 行取り・段抜き、17 ポイント、括弧書きは 14 ポイント）

※章が変わるごとに改ページ（偶数・奇数ページを問わない）

中扉は半扉とし、章を始める。

※段落背景色をつけることで、節や本文との区別を分かりやすくする。

節　「第三節　向郷遺跡の環状集落と集団墓」（原則 1 行、14 ポイント、括弧書きは 12 ポイント）

※節は変わるごとに改ページ

項　「1　宇津木台Ｄ環状集落の構造」（2 行取り、12 ポイント）

※項番号は、一桁は全角、二桁は半角

※章番号・項番号は一字下げ。番号とタイトルの間は全角 1 文字あけ。

※章・節のタイトルは可能な限り 1 行に収める（項は 20 字をめど）。最大でも 2 行とす

る（副題込み）。副題は――で囲み、原則強制改行する。
※項タイトルは 1 行に収める（項は 20 字をめど）。

吊り見出し　10.5 ポイント

本文　10.5 ポイント（括弧書きは 9.5 ポイント）、行間 10.5 ポイント
※派生として吊り見出し付き本文あり。吊り見出しのフォントは見出しに使うフォントと同じとする。

箇条書き　①、②、③を使う
※ポイントは本文と同じ。
※行頭一字下げ。①と文の間は半角あけ。2 行以上の場合は文頭揃え。

史料の引用
※文中に組み込む場合は「」で括る。
※段落として扱う場合は、全体を 2 文字分下げる

注　原則として注は付けない
※用語解説ページを設ける可能性はあり。

挿図キャプション　8 ポイント（括弧書きは 7 ポイント）（中央揃え）
※番号は、部番号 - 部内での通し番号とする
　図 1 - 1
※本文中に複数の挿図番号を記載するときは、（図 1 - 3 ・図 1 - 4 ）などとする。
※数字は半角。「-」は全角。
※挿図は原則としてページ左側上段を基準位置とする。
※挿図とキャプションは半文字～1文字分あけ
※挿図右側と本文は1行（2～3文字分）あけ、挿図キャプションと本文は3文字分あけ

挿図中の文字　7 ポイントないし 5 ポイント
※洋数字はコンデンス書体を使用

表キャプション　8 ポイント（括弧書きは 7 ポイント）（均等配置最終行左寄せ）
※番号は、部番号 - 部内での通し番号とする
　表 1 - 1
※数字は半角。「-」は全角。

※表は原則としてページ左側上段を基準位置とする。
※表とキャプションは半文字～1文字分あけ
※表右側と本文は1行（2～3文字分）あけ、表下側と本文は3文字分あけ

表組文字　8 ポイント
※洋数字はコンデンス書体を使用

キャプションに付随する説明文　8 ポイント（括弧書きは 7 ポイント）

引用・参考文献表記　10 ポイント・行間 5 ポイント
※引用・参考文献の名称は可能な限り本文に書きこむこととする?。

※部ごとに巻末にまとめる（本文中に記した参考文献名も含む）。
※ページは記入しない【ただし、校正作業に備え、原稿には該当ページを記すほうが望ましい】
※同じ著者が同一年内に発表した別の成果を使用する場合は、ａ　ｂ　ｃをつけて区別する。（安孫子二〇二三ａ・二〇二三ｂ）

巻末における記入例

【書籍】
小林謙一　二〇〇四『縄紋社会研究の新視点　―炭素 14 年代測定の利用―』　六一書房

【書籍の章】
藤田富士夫　一九九九「縄文尺はなぜ使われた」『最新　縄文学の世界』小林達夫編　朝日新聞社
谷口康浩　二〇〇一「環状集落の空間構成」『縄文時代集落研究の現段階』（第 1 回研究集会発表要旨）縄文時代文化研究会編　縄文時代文化研究会
安孫子昭二　二〇二三「第 6 章第 3 節　向郷遺跡 3 - a 区　第 26 地点」『新編立川市史 資料編 先史』立川市史編さん先史部会編　立川市

【雑誌掲載論文】
平本嘉助　一九七二「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化」『人類学雑誌』八〇-三　日本人類学会
桐原　健　一九七四「鍋を被せる葬風」『信濃［第 3 次］』二九六　信濃史学会

※雑誌の通巻表記・巻号表記は、慣例に従う

出典一覧表記　10 ポイント・行間 5 ポイント

※出典はキャプションには書き込まない。
※部ごとに巻末にまとめる

表記について

数字表記

原則、漢数字を使用する。
一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇
二一三年前
五〇〇〇年前
一万五〇〇〇年前
一・五倍、〇・三五㍍
※小数点は「・」を使う
※十は使用しない。

年月日表記

明暦三年（一六五七）一月一八～二〇日
享保二一年（一七三六）
昭和二〇年（一九四五）八月一五日
享保年間（一七一六～一七三六）※上二桁は省略しない
明治時代（一八六八～一九一二）、大正時代（一九一二～一九二六）、昭和時代、平成時代
※元号は、近世までは「年間」、近代以降は「時代」とする
※元号をさらにまとめるときは「時代」とする。平安時代、鎌倉時代、江戸時代
※西暦併記は、見開き内で最初に出てきた元号につける。
※元号の切り替わり年の表記方法
元文元年（一七三六）、・・・歴史時代は原則として元年優先
明治四五／大正元年（一九一二）、・・・月日により決定。

下巻における年次表記は西暦を優先させる可能性あり。
一九四五（昭和二〇）年

英数字表記

※資料編史料番号のほか、遺構番号や軍用機など、英数表記が妥当な場合に使用。原則半角とする。ただし、固有名詞の場合は全角。
※4文字までは原則として縦中横とする。
加曽利E式、NTT、JR東日本、B29
向郷遺跡第26地点SE103、多摩ニュータウンNo.107遺跡

単位標記

※㌔と表記するか？キロと表記するか？km（縦中横）表記とするか？

※キロメートル、キログラム、センチメートル、ミリメートルは、文意によりキロ、センチ、ミリと省略可

六キロメートル、〇・三五メートル、五・四センチメートル、ミリメートル

一〇・四キログラム、グラム

一〇〇平方メートル

一〇〇ヘクタール、一〇〇アール

パーセンテージ表記

60 %、39.5 %

※数字は半角とする。「%」は全角とする。

※小数点は一桁まで。ただし、可能な限り小数点以下は四捨五入（JIS Z 8401　規則 B）する。

漢字・ひらがな等の表記基準

立川市施策シート表記等見直しの考え方、共同通信記者ハンドブック第 13 版以上

校正時、最終的に立川市の表記規則に従うこともある。

資料編出典の場合の表記

『先史』表 6 - 10、第 6 - 120 図（挿図・表・写真番号を記載）

『近世 1』一 - 133（章番号（漢数字）- 史料番号（半角洋数字）とする）

『現代 1』432（全頁通し番号のため史料番号（半角洋数字）のみ）

『柴崎の民俗』三二～四〇頁（ページを参照するときは該当ページを記載する）

※『近世 1』の「1」は全角

奥付

編集　立川市史編集委員会議編？立川市史編さん委員会編？

発行　立川市